長野大学紀要　第22巻第3号　1－19頁（215－233頁）2000

言葉についての省察 (1)
―― 言語哲学的研究 ――

Philosophical Consideration On The Nature Of Language (1)

大塚明敏・鈴木宏哉・葉石光一
Akitoshi Ohtsuka, Hiroya Suzuki, Kouichi Haishi

「言葉」と使うべきか、「言語」と使うべきか、について

まずは、研究テーマ「言葉についての省察 ― 言語哲学的研究 ―」にある黒丸印をつけた部分である「言葉」と「言語」の辞書的な意味を踏まえた著者なりの用語上のあり方から述べておくこととする。

岩波書店1999年発行の新村　出編　「広辞苑」より引用したものである。

［ことば］（言葉・詞・辞）

① ある意味を表わすために、口で言ったり字に書いたりするもの。語、言説。
② 物の言い方、口ぶり、語気。
③ 言語による表現。
④ 言葉のあや。事実以上に誇張した表現。
⑤ 文芸表現としての言語、詩歌、特に和歌など。
⑥ 《詞》謡い物・語り物で、ふしのつかない部分。
⑦ 物語などで、地の文に対して会話の部分

［げんご］（言語、漢音ゲンギョ）

① 人間が音声または文字を用いて思想・感情・意志などを伝達したり、理解したりするために用いる記号体系。または、それを用いる行為。ことば。　→ごんご
② ある特定の集団が用いる個別の言語体系。日本語、英語の類。
③ 〔言〕(langue) ソシュールの用語で、ラングの訳語。

※［ごんご］（言語、「言」「語」ともに呉音）　ことば。げんご。

これまで紹介してきた「広辞苑」の説明でもわかるように、日本語においては、「言葉」も「言語」も一般には大体同義に解して用いられていると理解してよいであろう。

実際、われわれは、同一の障害を指して「言葉の障害」とよんだり、「言語障害」と呼んだりしている。同様の表現形式を用いてその対策については「言葉の指導」と呼んだり、「言語指導」と呼んだり、あるいは、「言語治療」と呼んだりしている。

スイスの比較言語学者、フェルジナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure　1857～1917) の流れを汲む言語学等においては、「言語 (langue ラング)」は集団や社会の言葉、文化遺産としての民族の言葉を意味し、「言葉 (parole)」は、個人が日常用いる言葉を意味するというように明確に分けて用いる立場もあるが、筆者らの場合には、広辞苑に示されているような日本語としての常識により、両者の関係や立場を概念的に区別しないで、「言葉」の方に「言語」を包み込んで、論述の用語としては、主として大和言葉である「言葉」の方を用いていくこととする。

ただし、用法上無理な感じがしない限りできるだけ「言葉」で説明していくということだけで

あって、「言語哲学的研究」のような場合には、「言葉の哲学的研究」としたのでは伝えようとするニュアンスがいささか変わってしまうので、社会的な慣用に従って「言語哲学的研究」と素直に使っておくこととする。

序　言

この世に住むすべての人間は、人間である限り、この世に誕生してその生を終えるまで誰しも言葉との関わりなしには人生のすべての局面において効果的、能率的、かつ人間的に、豊かに、満足には生きることが困難な存在である。

そういう意味では、もし、言葉の発達、習得、操作等の面において、生得的であれ、後天的であれ、何らかの原因によって障害が生じるとすれば、その人自身の個人生活や社会生活はもち論として、人格形成や自己実現に至るまで、あるいは、挑戦的で充実した人生を送る上で、また、安らかな生活を送る上で、重大な支障を来たすであろうことは、疑いようのない事実である。

人間が言葉という道具を持っていて、それを目的に応じて操作できるということは、多くの様々な分野の研究者が指摘するように、常識的な意味においては、まさしく人間であること、なかんずく知的な人間であることを証拠づける最も的確な指標とさえなり得るものである。フランスの心理学者のビネー（Alfred Binet 1857～1911）にいたっては、そこに着目して知的障害児の判別に活用するために精神年齢なるものを考想し、言葉を用いた個人用の知能検査を創り出したくらいである。

しかも、その言葉は、人間に遺伝的、生得的に刻印されているものではなく、人間が人間の社会に生まれ、そこで育ち、生活することによって、周囲の人と関わりながら、短く見積って3ないし4年の歳月や月日をかけて、そこで使われている言葉を学習し、自己選択的に、それこそ不知不識の間に自然に身につけていくものである。

その言葉を母国語と呼んでいるが、日本人の母国語は日本の国に生まれ育った限りにおいては当然のこととして日本語であり、イギリスに生まれ育ったイギリス人の母国語は英語であり、フランスで子どもが育てばフランス語であり、ドイツで生まれ育てばドイツ語であるということになってくる。このような現象は自然の摂理としか言い様がないものである。

そのように誰もが自分の国や民族の言葉である母国語にどっぷりとつかって日常何不自由なく暮らしているがために、脳血管障害や交通事故の後遺症としての失語症になるというような何か異常な事態とか、言葉のわからない外国へ旅行をするといった特別な事情でも生じない限り、人々は滅多に言葉の存在など意識するようなことはないであろう。

これが自然な状態であり、一般の生活にあってはそれほどまでに言葉の存在というものは、人間の生理的生存に不可欠な空気同様に人間にあまりにも密着し過ぎており、当たり前過ぎるものである。

したがって、常態にある時は、誰も言葉の有難味に気づかないし、ましてやわざわざ取り上げて「言葉とは何か。」などと、哲学的に問い返すなど益々もって愚にもつかない事柄であり、大方の人々にとって関心が持たれないことも無理からぬところである。

しかし、たとえ、どのような専門領域の仕事であれ、言葉の問題を扱う専門家の場合には、ここが研究すべき重要なポイントであり、やはり、言葉の本質、本性というものを的確に把握しておくことが要求されてくることになるのではあるまいか。特に臨床的な人間と直接関わるような仕事についている場合にはなおさらである。

その対象が子どもであれ、大人であれ、本人自身が何らかの言葉の障害を有する場合には、いよいよもって言葉の本質や本性についてのよりはっきりとした理解が要求されると考えるのが合理的な見識と言うべきであろう。

何故ならば、それは、言葉の所有者にして利用者でもある複雑な人間主体に関わる事象全体に絡む根底的な問題であるからである。それにも拘らず、言葉の本質についての究明や吟味に至っては、単にコミュニケーションの道具程度の狭い偏った理解の範囲の中でしか取り上げられていないのが実態ではなかろうか。

たとえば、構音障害であれば構音障害、吃音なら吃音、口蓋裂ならば口蓋裂、脳性マヒならば脳

性マヒ、ＬＤならばＬＤ、自閉症ならば自閉症、知的障害ならば知的障害、聴覚障害なら聴覚障害、失語症なら失語症、痴呆性の言語障害であれば痴呆性の言語障害、というような各障害領域によるタコツボ式の限局偏在した言葉に対するとらえ方がそれを物語っているであろう。

それ故にこそ言葉の本質や本性に対するとらえ方としては、これではやはり不十分であり、もっと全体的でトータルなとらえ方が必要であろうと考えざるを得ないわけである。何故ならば、言葉の本質や本性を深く知れば知るほどより適切な指導法や治療法の創造が可能となるであろうと考えるが故である。またその逆の場合には、しばしば誤った、ないしは偏った指導法や治療法に陥り、言葉の障害からの子どもや患者の立ち上がりや脱出を停滞させたり、あるいは、その速度を鈍らせ、効率を悪くしたりする恐れをも生じてくるのではあるまいか。

となると、「たかが言葉とは何ぞや？などの哲学的問題に過ぎぬ。」などと、とても悠長になど構えておれない、ゆゆしき一大事ということになってくるであろう。

したがって、この度の研究は、フンボルト（Wilhelm von Humboldt 1767～1835独、プロイセン）のひそみにならい、言わば、言語哲学的研究法により、言葉の本質や本性の究明、追究を試みようとしたものである。

方法的には、過去、現在にわたる言葉に関係する代表的な研究者が、自らの著書や論文等において言葉というものを一体どのようにとらえているのかを分析し、あるいは読み取り、抜粋的にといってもそれを日本語的によりわかり易い表現にしたものを提示することによって言葉の本質や本性を探ぐり、解明を試みるつもりである。

いささか乱暴で大胆過ぎるというそしりも免れないが、このような研究方法を用いた方が言葉の本質や本性、その複雑さといったものを多少なり主観の域を脱して客観的に把握し、明示する上では、反って効果的で近道であろうと判断したが故である。

最初に言語哲学のしにせのデパートとも言うべきフンボルトの説を俎上にのせ、順次諸家の説を紹介していくこととする。

第１章　ウィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt）の説

１　人物について

(1)　1767年、プロイセン貴族で、軍人にして当時の皇太子侍従であったアレキサンダー・ゲオルク・フォン・フンボルト（Alexander Georg von Humboldt 1720～1779）の長男として現在のドイツの首都ベルリン郊外のポッダム（第２次世界大戦末期に連合国主脳であるルーズベルト、チャーチル、スターリンが会談して日本の無条件降伏を決めた所）に生まれる。

２歳年下の弟に探険家や博物学者として有名になるアレキサンダー・フォン・フンボルト（Alexander von Humboldt）がいる。1835年学究生活を続けたテーゲルの館にて没する。享年68歳。

(2)　フンボルトは若い時分から生涯を通して自己完成や自己形成に情熱を燃やした教養の高い学究の人である。

また、それに必要とされる才能や財産についても運よく恵まれていたと評してよかろう。

青年期には、家庭教師クント（Gottlob John Christ Kunt 1757～1829）のすすめによりベルリンにあったユダヤ系の哲学者、モーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn 音楽家フェリックス・メンデルスゾーンの祖父に当たる人）のフランス風サロンに出入し、当時盛んであった啓蒙的な学問の雰囲気に浸たる。

1786年にモーゼスが死去すると、ユダヤ人の医師マルクス・ヘルツ（1747～1803）の若き美貌の夫人ヘンリエッテの主催するサロンの常連となり、当時の知的エリートの大きな部分を占めていたユダヤ人の優秀な人々と相識り、相語らい、その影響を強く受ける。

フンボルトのバックボーンとも言うべき揺ぎない普遍的なヒューマニズムもこの時期に培われたのではなかろうか。

1787年、20歳でフランクフルトの大学に入るが母親が期待した政治家や官僚になるための学問である政治学や法律学には振り向きもしないで専ら

読書に熱中し、遂には1年だけでそこを去り、啓蒙的で自由な雰囲気のあるゲッチンゲン大学で学ぶことにする。

歴史学者のハイネ教授の下でギリシャの古典を学び、一方ではカントの哲学の研究に専心する。プラトンや、アリストテレスを除けば、カントの哲学に最も傾倒する。

カントの主張する「啓蒙」とは、「言われのない迷信や因襲から人間を解放して、人間の尊厳と自由を守ろうとすること」を意味していた。フンボルトは、この考え方に強く惹かれ、共鳴するところがあったようである。

1791年、24歳の頃、同じサロンに出入していたシャルロッテ・フォン・レンゲフェルトの婚約者である作家でイエナ大学歴史学教授であるシラー（Friedrich von Schiller, Johann Christoph 1759〜1805）と出会い、以来、ふたりは生涯にわたって親友の関係を結ぶこととなる。

フンボルト27歳、シラー35歳の時には、シラーの指導を受けるためにフンボルト一家はシラーの家の近くに移り住むほどの熱の入れ様であった。この時期に、シラーはフンボルトに対して「君は創作よりも論評や研究の方が向いているので、そちらをやったがよいのでは」と厳しい注文を出している。フンボルトの一生を通して見る時、シラーのアドバイスは結果的に適中していたようである。

その後、文豪ゲーテと親交のあったシラーを介してゲーテとも親交を結ぶようになる。

ゲーテはフンボルトの18歳年長で、シラーは8歳年上であった。またシラーはゲーテの10歳年下である。

このトラアングルの関係はうまく行って、相互に好影響を受けたり、与えたりしたようである。しかし、フンボルトが最も深く兄事したシラーは1805年、ワイマールにおいて46歳で早世する。

1826年の冬フンボルトはワイマールにゲーテを訪れ、時の経つのも忘れて語り合う。ゲーテ77歳、フンボルト59歳の時である。話題はシラーであり、人間の死についてであったろうと思われる。

何故ならば、ゲーテの机の上にシラーのシャレコウベ（頭蓋骨）が置かれていたからである。

極めて異常な風景として想像されるであろうが、それほどまでにゲーテはシラーを友人として愛していたということを物語るものではなかろうか。またゲーテは自然科学者であり、この時期、動物や人間の骨を集めて研究していたということもあろう。

この会見の5年後、まずゲーテが82歳でこの世を去り、フンボルトも8年後にみまかることになるので、これがゲーテとフンボルトのこの世の別れと言えるであろう。この時に至るまでふたりの交情は続いていたのであった。フンボルトの人間として啓発されるところも多大であったに違いない。

その時代としては、最高の文化人を親しき友として交流し、学問的な営みや自己形成に努めた人と評してよかろう。

また、人生の終焉に至るまで人間についてできるだけ多くのことを知り、それを吸収しなければならないと考え、かつ、それを実践した自己完成への強固な意志を持った人であった。若き日に友人のフォルスター（ゲッチンゲン大学教授ハイネの長女テレーゼの夫でイギリスのジェイムズ・クックの世界航海に参加し、その旅行記を著して有名なった人物）宛に1791年に出した手紙にすでに次のように述べている。

「この世には、個人の最高の力と、個人の最も多面的な教養形成以上に大切なものは何もない。だからこそ、自己を形成せよというのが真の道徳的なおきての第一である。……」

フンボルトは、この手紙に言明した通りに最後まで生きたのであった。東洋人では一寸真似のできない生き方かも知れないが。

(3)　フンボルトは、1802年、35歳の時、政治生活に足を踏み入れて、1819年、52歳の時、その自由、人権を求める政治主張が政府に入れられず隠退するが、彼が活躍した時代は丁度ナポレオン戦争の時代であった。

個人の自由や権利の尊重を基盤とした政治を実現しようとする、その時代としては最も進んだ考えを持った啓蒙的政治家のひとりである。

対外的には、理想を追う剛腕の外交官であり、国際政治家であった。

ナポレオン戦争の戦後処理をテーマとする権謀渦巻くウィーン会議という国際舞台においてオーストリヤの宰相メッテルニッヒを恐れさせ、フランス代表のナポレオンをも手玉にとるほどの海千山千とも言うべきタレーランとも一歩も引かず堂々とわたり合う愛国者であった。また、領土の取り合いや各国王朝の保全策以上に、民衆の権利や市民の自由の保障を問題として提言する稀有なヒューマニストでもあった。残念ながら当時のヨーロッパ列強の受け入れるところとはならなかったが。

内政的には、1809年、プロイセン内務省の「文教局」局長に任命され、プロイセンの教育制度の抜本改革を実行に移す。旧来の身分や階級中心の教育、職業準備教育中心の教育から自由な個人の完成、市民の教育、普遍的な人間形成のための教育へと大転換を行なう。

こうして旧来の身分制度に応じた教育体系を否定して、理念的には、教育を万人のために解放するという階級打破の方向を強くアピールしたのである。

また、学校制度の体系化もはかり、ペスタチー主義の方針に基いた初等教育から彼が発想した新人文主義によるギムナジウムを経て専ら学問を追求する大学に至るまでの縦に通った体制を築く。

彼が創立した大学は研究、教育、学習の自由が保証された国立のベルリン大学であり、後にドイツの大学のモデルとなっていく。

注目すべき点は、広大な国有地を大学に与えて、それによる収入によって、大学の経営ができるようにし、本当の意味で大学の自治を実現する財政的基盤を用意したことである。

その任にあったのは僅か1年6か月に過ぎなかったが、後任のニコロヴィウス（1767～1839ペスタロチーのところへ研修生を派遣して、その教育法を学ばせるようプロイセン政府に提言する。ヒューマニストにして理想主義者、ペスタロチーの若い友人）と教育家ペスタロチー（1746～1827）の弟子ツェラー（1774～1846）等がフンボルトをよく補佐し、その改革の中にフンボルトの理念とペスタロチーの精神を生かすべく奮闘する。

フンボルトは「子どもを教育するには、ただ読み、書き、計算ができるようになりさえすればよいのではなく、子どの身体と精神の能力すべてが可能な限りよく調和して発展することを目指さなくてはならない。そして、子どもが聞き、語り、行うすべてを、あらゆる瞬間に何故にそうすべきであって、それ以外のことをしてはならないのかを十分意識するように指導しなくてはならない。」と考えていた。まさに今日でも通用する考え方、それどころか今の時代の教育者が聞いたら耳が痛くなるような教育の核心をつくとらえ方である。今様に言えば、個人のマキシマム・グロース（最大限の成長発達）を目指すことをもって真の教育や人間形成と考えていたようである。

政治家としてのフンボルトをトータルとして評価すると、52歳という若さで在野の人となっているし、どちらかと言えば、挫折の人生を送った人ではなかろうか。

(4)　オーソドックスな意味で近代の言語哲学の基礎を創った巨人である。

今日の言語学の世界においては、軽く一般言語学の元祖ぐらいにしか評価されていない側面もあるが遥かにそれを超え、覆う人物である。そういう観点から見ると今日でもフンボルトを超える言葉の総合的な研究者は、その後出現していないのではなかろうか。

フンボルトこそは、言葉とは何か、人間の言葉の本質とは何か、ということについて最も的確に、しかも総合的、全体的にとらえた、今日的に言えば、言葉を複雑系としてとらえた最初の本格的研究者と評すべきであろう。

筆者ら（大塚、鈴木）の大学時代の恩師で言語学者であった東京教育大学教授佐藤則之の恩師に当たる京都大学教授泉井久之助（言語学者）の評によれば、「フンボルトの言葉に関する研究の結果は、巨視的であるとともに微視的であり、思弁的であるとともに実証性を帯びている。」ということになっているが、それは、むしろ、言葉を総合的なもの、全体的なもの、複雑な有機体としてとらえていたと解すべきではあるまいか。真理がたったそれだけのことであったとしてもフンボルトの生涯をかけてとらえた偉大な成果である。

フンボルトは、13歳の頃、すでにギリシャ語、ラテン語、フランス語に習熟し、イタリヤ語にも

明るくなっていたそうであるが、言葉に対する種々な興味や関心はすでにこの時期に芽生えつつあったのではなかろうか。ギリシャ語やラテン語を学ぶ直接の動機は、それによって古典を読み、ギリシャ人やローマ人の人間性を知りたいというところにあったようであるが。

フンボルトが、本格的に言葉の研究にのめり込むきっかけをなすものは、1797年から1801年にかけて3年半、パリに家族で移り住んで、シーエス（フランス革命の理論家　1748～1836）や、スタール夫人（自由主義を貫いた作家　1766～1817）、ジャック・ルイ・ダビッド（ナポレオンの載冠式の作品で有名な画家　1748～1825）、ディドロ（百科全書で有名）の娘、アンジェリーイ、コンドルセ（フランス革命で処刑される）の未亡人等と交際して優雅な生活を送っていた頃、ピレネー山脈を越えて家族ぐるみでスペイン旅行をし、ヨーロッパの他の民族と異質なバスクの風習、制度、文学、言葉などに触れて、強烈な衝撃を受けたことにあった。言葉に対する研究的な興味は、この時から具体的な形をとってくる。

翌年再び、ひとりでバスク旅行に出発し、民族の性格や精神的特性がいかに深く言葉そのものに関わっているかに気づき、言葉の構造と民族精神との内的関連を明らかにしようという問題意識が関心の中心を占めるようになり、益々その研究に没入することになってくる。

やがてこういった分野の研究は、彼のライフ・ワークと化し、1819年、52歳にして公職を辞してより1835年68歳で没するまで一貫して継続されることとなる。

1820年の暮れ頃からは、サンスクリットの学習に取りかかり、古代インドの精神生活や社会生活の解明と関連させながら研究を進めていく。

次いで、南北両アメリカ大陸先住民の言葉の学習に手をつけ、更には、インド洋から太平洋にかけて広く分布している広義のマレー語、ビルマ語、シャム語、中国語、日本語に至るまでサンスクリットに対したのと同様の情熱を持って研究の対象として追究していく。

当時としては、世界の言語に通暁するヨーロッパ有数の大人文学者であった。

その集大成がフンボルトの死後、弟の自然科学者アレキサンダーによって、かつてフンボルトの身近かにいて研究を助けた助手にして弟子でもあったヨーハン・ブッシュマン（Johann Buschmann　ベルリン王立図書館管理官）を作業担当者として、1836年に編集、刊行されたジャワ島の古い雅語であるカヴィ語の研究である「ÜBER DIE KAWI-SPRACHE AUF DER INSEL JAVA（カヴィ語研究序説）」という大著である。

実は、フンボルトの考究した言葉の本質を探る上で、今回分析のための原資料として活用させてもらったのが、その日本語訳で亀山健吉の全678頁にわたる分厚い労作「フンボルト　言語と精神」である。

(5)　パーソナリティ的には幼少の頃より家令や家庭教師にかしずかれた貴族育ちのお坊っちゃんで誇りが高く、片や国家からの自由や人権を説く理想主義者でヒューマニストの偉大な教養人であり、自らの頭脳にも自信があって自負心が強く、傲岸不遜で、権力欲もなしとせず反骨精神もあって妥協を知らない人であった。

そうかと思うと、気分が変わり易く、嫌な事態に遭遇すると堪え性が乏しく、今様に言えば切れ易い人でもあった。

となると、フンボルトに対応せざるを得ない相手方、なかんずく、権力者の立場にある国王とか、政府要人としては、恐らく極めて扱い難い煙たい存在の人ではなかったろうか。

女性関係についてもアクティブで、フンボルトより6年前に他界した生涯の伴侶カロリーネの他に彼自身が情熱を燃やした女性がいたようで、妻との関係においても必ずしも平穏無事ばかりではなかったのではと疑われるところである。一見、謹厳実直そうでありながら、人間の持つどろどろとした闇の世界をも垣間見せるなかなか人間くさい人物ではなかろうか。

フンボルトは、言葉はエルゴン（作品）でなくエネルゲイヤ（活動体、生命体）であると捉えたが、人間もまた彼流の生き方によれば、まさしくエルゴンでなく、エネルゲイヤということであったのであろう。

とにかく、非常に振幅の激しい矛盾の塊りとも言うべきとても一筋縄では理解し難い強烈な個性

を持った人物と評してよいであろうが、これがまた、フンボルトのフンボルトらしい生き方であり、生き様であったと見ることもできるのではあるまいか。

2　言葉の本質のとらえ方について

フンボルトが大半の人生をかけて言葉をどのようなものとしてとらえていたかということ、すなわち、フンボルトなりの言語観を訳本ではあるがその著作を熟読吟味して分析し、抜粋し、わかりやすく整理を試みたものである。

日本語訳の資料「フンボルト（Wilhelm von Humboldt）著　言語と精神（ÜBER DIE KAW-I-SPRACHE AUF DER INSEL JAVA）　亀山健吉訳」を中心に作業をしたとは言え、そのままでは難解な部分もあるし、研究の進め方としては、書かれている通りの文や文面で抽出するだけではなしに、できるだけ誰にでもわかるように読みとることをも心がけたつもりである。なお、文面に現れている事柄のみならず、筆者なりに行間の意を汲み取った分をも含めて記述していることを付言しておく。

邦訳されたフンボルトの大著の他に、泉井久之助著　「言語研究とフンボルト」　弘文堂発行（昭和51年）全401頁、並びに、亀山健吉著　「フンボルト　文人・政治家・言語学者」　中公新書525　中央公論社発行（昭和53年）全270頁、も参考にさせていただいている。

なお、以下に顔を出す整理上の大まかな枠づけはあくまでも便宜的なものである。

［言葉と民族・人間・文化］

○言葉は、人間個個人の持つ民族の文化と分かち難く結びついているものである。

○言葉は、民族や国民によって異なるという制約を持つものである。

○言葉は、どんな場合にも民族に即した形式を持つものである。

○言葉は、民族の独自な精神的特性と内的に密接に結びついているものである。

○言葉は、民族が創造したものであるのと同時に、民族の構成員である個人個人が自ら創り出したものである。

○言葉は、民族の精神が外面的な形をとって現われてきたものである。

○言葉は、民族の性格や世界のとらえ方を表わすものである。

○言葉は、どの民族の言葉であれ、それぞれ特有の世界の見方が潜んでいるものである。

○言葉は、人間の持つ世界に対する見方である。

○言葉は、民族の精神の歩みの最も隠された隅々をも明かにし、その性格の最も秘められた微細な襞の一つひとつに至るまで克明に描き出すものである。

○言葉は、民族の精神であり、霊であり、心の最も忠実な器官であり、民族的生命と精神の発現である。

○言葉は、民族や人間の息吹きであり、魂である。

○言葉は、人間性と民族性の無限の深みから生まれるものである。

○言葉は、それぞれの民族や人間の有する概念の組織や表象の仕方を含んでいるものである。

○言葉は、個人の心理的性格を有するのと同時に、社会・民族的性格をも有するものである。

○言葉は、民族や国民の内部的な運命に基いて天から授かった贈り物である。

どの民族、どの国民を取ってみても、どのようにして自分たちがその言葉を形成してきたのか少しも知らずにその言葉を用いている。

○言葉は、文明的に進んだ民族、原始的な民族であるとを問わず等しく持ち得る普遍的な能力である。

○言葉は、どのような民族の言葉であれ、本性において優劣をつける本質的な差があり得るはずはなく、皆同格である。

○言葉は、ひとりの個人のものではなく、常に民族全体のものである。しかも個人の使用を離れては存在しないものである。

○言葉は、言葉であるのと同時に、その民族や人間の物の見方、考え方、感じ方である。
　それぞれの民族の物の考え方、感じ方には、太古の昔よりそれぞれ固有の形があり、それが民族に何らかの影響を与えているものとすれば、当然その言葉にも多くの影響を与えているにちがいないと考えられるからである。

○言葉は、民族や人間の文化であり、教養である。

○言葉は、民族や人間の世界観であり、思考の結合であり、この両者の一体化されたものである。

○言葉は、人間性や民族性と深く絡み合っているものである。

○言葉は、民族や人間全体の精神的財産である。

［言葉と人間・精神］

○言葉は、人間が創造したものである。

○言葉は、人間の行動、思想、制度などと同様に、人間の精神の力が有する創造活動によって産出されたものである。

○言葉は、人間の有する人間性という深みの奥底から湧き出てくるものである。

○言葉は、人間精神の根源から湧き出ずるものである。

○言葉は、人間の精神がやむにやまれずに自己を流出させたものである。

○言葉は、人間の内面的な必然的欲求によって創り出されたものである。

○言葉は、人間の心性の奥底から流露してきたものである。

○言葉は、人間の精神の持つ言葉を発展させようとする普遍的衝動が産出したものである。

○言葉は、文明ないしは文化の存在を可能にしているような人間の根源的な能力によって産出されてきたものである。

○言葉は、人間の理性本能が産出したものである。

○言葉は、神の世界とも交流し得る人間の理性を媒介として人間に具えられているものである。

○言葉は、他の人々との連帯や交流、協力の中で、すなわち、社会的状況の中で生まれてきたものである。

○言葉は、人間が単独では生きてゆけず、他の人の助けを必要とするところから他人と結びつかざるを得ず、そういった他との共同の営みを成り立たせる相互理解の手段として必要となったものである。

○言葉は、人間に備わっている精神の力の主要な働きのひとつである。

○言葉は、元来、人間の頭脳や心の中に潜在する能力であり、外部から言葉の刺激を受けてそれが次第次第に育ってくると自ずと理解作用や表出行動として現われてくるものである。

○言葉は、単に社会的な交流を保つために必要だという程度の外面的な要求にとどまらず、人間の本性そのものに根差した欲求から産出されたものである。

○言葉は、人間の内面の最も奥に潜む人間本然の性質と結びついており、そこから自発的に産出されるものである。

○言葉は、精神活動であると同時にその発露である。

○言葉は、人間の普遍的な精神の力が不断の活動を続けて現実のものとなっていく過程の一つの現われである。

○言葉は、人間の精神的発展と、その奥底においてぴったりと結びついているものである。

○言葉は、精神の力と密接不可分の関係にある存在である。

言葉は、精神の力といささかでも関わりのあるものならば、全体的のものであるか、個別的なものであるかを問わず関係を有するものである。

実際、言葉の中のどのような領域を取り上げてみても、精神の力と無縁なものはなく、無縁のように思われるものがあっても、やがてはそうでないことが分かってくるものである。

○言葉は、人間の最も内奥に潜む人間本然の性質と不可分の形で結びついているものである。

○言葉は、精神の力が受けているのと同じ制約を受けながら精神の力と共に成長してくるものであり、また精神に生気を与えつつその活動を促す原理ともなる存在である。

○言葉は、精神と相前後して歩むとかして、相互に分離しているものではなく、両者は全く一心同体であり、かつ、人間の持つ知的能力の同一の行動なのであって、あくまでも分離し得ないものである。

○言葉は、その根の持つ微細な繊維の一つひとつを人間の精神の奥底へと伸ばしていくものである。

逆に人間の精神の力も言葉の方にはね返って影響を及ぼしていくこととなる。

○言葉は、精神と全く一体となったものであり、人間の持つ知的能力の同一の行動であって、あくまでも相互に分離し得ないものである。

○言葉は、人間の内面の精神活動と密接に結びついているものである。

○言葉は、人間を人間性の最奥にまで導くものである。

○言葉は、人間の心の動きと結びついた有機体である。

○言葉は、特定の目的を目指す精神の活動である。

○言葉は、人間性としての全体性の奥深い内懐の中で様々な人間性と密接に結びついているものである。

○言葉は、人間の知的特性と全く時を同じくして、かつ、相互に絡み合いながら人間の心の窺い知れない深みから発現してくるものである。

○言葉は、人間の精神が産出したものの中で極めて高次元のものである。

○言葉は、人間の知性と最初から一体となったものである。

○言葉は、人間の精神から発して、再び自他の精神へと還流していくものである。

○言葉は、あらゆる種類の人間の知的な営みと密接に絡んでいるものである。

○言葉は、その発生当初においても、すでに、全

く人間にふさわしいだけの性質を備えていたであろうと考えられるものである。

○言葉は、思考が必然的に完成させたものであり、同時に、人間をして人間たらしめている素質のひとつが、自然に展開したものである。

○言葉は、その発現のルーツを人間の中に、最初から原型として与えられているものである。

○言葉は、意識および自由を生来具備している人間のみが所有し得るものである。

○言葉は、人間たる者のすべてが持ち得る能力である。

○言葉は、それが発生した時からすでに人間と人間とを結びつける媒介手段となっているものである。

○言葉は、人間だけが持っているものである。

○言葉は、人間が自分の中から紡ぎ出したものである。

○言葉の根源的能力は、人間が先天的に内在させているものである。

○言葉の根源的能力は、人間を人間たらしめている素質の自然な表われである。

［言葉と概念・思考・思想・感情］

○言葉は、思考と統合された有機体である。

○言葉は、人間の概念形成のための不可欠の要件である。

○言葉は、人間の世界観や思考の結合を統一したものである。

○言葉は、思考や感情の媒介者である。

○言葉は、思考の構造や手段である。

○言葉は、思考の展開を助長し、促進するものである。

○言葉は、人間が思考する時の媒介者である。

○言葉は、人間の思考する力、特に人間が思考する際の創造力そのものにまでも影響を及ぼすものである。

○言葉は、外なる世界を内なる思考へ変換する際の媒介者である。

○言葉は、思考を形成してゆく器官である。

○言葉は、思考を明晰にしたり、表象や概念を形成したりする上でなくてはならないものである。

○言葉は、人間の概念形成や正しい思考の手段である。

○言葉は、現実を抽象した概念である。

○言葉は、人間に表象をもたらすものである。

○言葉は、対象そのものの模写ではなく、対象によって心の中に作られたイメージや意味に即して貼られたラベルである。

○言葉は、人間がすでに知覚しているものを表示するものである。

○言葉は、人間の心の中に対象を実在させる媒介者である。

○言葉は、人間が主観的に対象を知覚する仕方全部に影響を及ぼすものである。

○言葉は、人間が周囲の世界を見る一定の立場であり、眼鏡であり、枠組みである。

○言葉は、概念と一体となったものである。

○言葉は、概念を明確化するとともに精妙の度を加える働きをするものである。

○言葉は、人間の内面に人間としての本性を展開する働きをするものである。

○言葉は、知的活動と一体となっているもので、相互に不可分の関係にあるものである。

○言葉は、表象による客観性の定立を可能にする媒介者である。

○言葉は、個々の概念を表わす符号である。

○言葉は、人間が対象を把握する時の枠組である。

○言葉は、人間の知覚に表現を与え、知覚を起こさせるだけの強さや繊細さ、柔軟さを有するものである。

○言葉は、みずから創造し、思考に形式を与えることによって、新しい思考と思考を結合し、精神に影響を及ぼすものである。

○言葉は、人間の内面的現象の総体、つまり、物事の感じ取り方や心の一定の持ち方といったものと、非常に密接に、かつ活発に相互作用を行なっているものである。

○言葉は、現実や世界を模写する記号化されたシンボルであるとともに、それによって元の世界の姿を最も純粋に再現する手掛りともなり得るものである。

○言葉は、どのような思考活動の中へもいとも容易に、しかも全く己れを空しゅうして入り込んでゆけるような働きをするものである。

○言葉は、人間をその極限にまで知的に高め得るものである。

○言葉は、どんな時でも、人間の頭脳や心情の奥に観念として存在するものである。

○言葉は、不断に燃え続ける人間の思考の流れに瞬時の静止もないように、それに即して一瞬といえども静止しないものである。

○言葉は、表象するものを現実に自らの外部に放出して、表象の客観性の完成を可能にする媒介者である。

○言葉は、思考の世界さえ思考し得る媒介者であり、思考の跳躍板である。

○言葉は、自然自体が知らない自然の科学を人為的に創り出す媒介者である。

○言葉は、人間と人間との約束に基く概念の記号である。

○言葉は、人間が人間世界に創り出した小宇宙である。

○言葉は、世界を人間と結びつけるものである。

○言葉は、対象を表現することによって、対象を把握する時の感覚受容を再現し、そういう行為をくり返し反復しては、世界を人間に結びつける媒介者である。

○言葉は、稲妻や衝撃のように走り、表象能力のすべてを一点へと凝集させ、同時に存在しているすべてを排除してしまう思考と一致するものである。

○言葉は、丁度思考が心の動き全体を捉えてしまうように、人間の内部に入り込んで、あらゆる神経を揺り動かすだけの力を持つものである。

○言葉は、人間全体を揺り動かす人間の知的な営みを助長するものである。

○言葉は、精神のさまざまな活動形態に適応でき

るものである。

○言葉は、人間の精神の働きに基く有機構造である。

○言葉は、概念の織り物全体と一部分の表象の仕方を含むものである。

○言葉は、その叙述するはっきりした対象の概念の他に、対象が惹き起こす感情的な要素を同時に再現しないではいられない存在である。

○言葉は、思惟し得るものすべてを総括して全体という無限で、しかもまさしく広大きわまる領域に直面するものである。

［言葉と人間形成・精神陶冶・教育］

○言葉は、人間の人格形成に効果的な影響を与えるものである。

○言葉は、人間の陶冶（教育）に対しても本質的な意味を持ち、影響を及ぼすものである。

○言葉は、人間の精神陶冶に不可欠のものである。

○言葉は、人間に魂を吹き込み、想像力豊かな内面形成を方向づける第一歩となるものである。

○言葉は、人間が人間になるための出発点である。

○言葉は、人間の精神形成に総合的に影響を与えるものである。

○言葉は、人間の最も深遠で、最も繊細な精神的志向に影響を及ぼすものである。

○言葉は、人間の持つさまざまな精神的な力を展開させ、自分なりの世界観を獲得するのに不可欠なものである。

○言葉は、人間の物の感じ方、考え方、心の持ち方全般にわたる調子の中にまで働きかけ、影響を及ぼすものである。

○言葉は、人間を人間らしくするものである。

○言葉は、人間であることの最も本質的な要素である。

　人間は、言葉によって始めて人間となることができるのである。

○言葉は、人間性の根源である。

○言葉は、全く内面的なものではあるが、それにも拘らず、同時に、人間自身を逆に支配するだけの力を備えた独立した外面的な現実の存在でもある。

［言葉自体］

○言葉は、人間の生命や生きる力のあらゆる面にかかわるものである。

○言葉は、元来、人間のあらゆる精神能力の総合作用の上に成立するものである。

○言葉は、人間の文化遺産としては、個人の心に対して外在的であり、一応独立したものである。

　しかし、その産出と使用については、個人の心に依存し、所属するものである。

○言葉は、人間を常にひとつの具体的な伝統の連鎖の中へ配列し、位置づける働きをするものである。

○言葉は、人間と世界そのものとの関わりから直接産出されるものである。

○言葉は、外側からの言葉による適切な刺激があって、つまり、状況や事物と結びつけて言葉を聞くという経験を何度もくり返すことによって、自然に育ってくるものである。

○言葉は、第一に無限なる自然と人間という有限なる自然との媒介者であり、第二にひとりの個人と他の個人との媒介者である。

○言葉は、人間の世界理解に役立つだけの明確さと明晰さを有するものである。

○言葉は、人間が世界という絵画を描く際の顔材料（絵の具）である。

○言葉は、人間の実際生活上の使用のために約束によって考案、設定した人為の媒介手段である。

○言葉は、人間生活のあらゆる場合の媒介者である。

○言葉は、人間が生きていくことのあらゆる領域に及んでいるものである。

○言葉は、人間の精神の動きを表現し、理解する際の媒介手段である。

○言葉は、人間が話したり、聞いたりする際の媒介手段である。

○言葉は、人間と人間の間のコミュニケーションの手段である。

○言葉は、個人と個人の間に橋をかけて、相互の理解を媒介するものである。

○言葉は、人間が自分の思考を他の人々との共同の思考に関連させて、明晰判明なものとする手段である。

○言葉は、話すという側面と、理解するという側面を持っているが、いずれも、同じ言葉の能力の異なった働きの結果に過ぎないものである。

○言葉は、事実とは直接の関係はないもので、理性の原則に従うシンボル（象徴）として、それ自身の体系性を有するものである。

○言葉は、シンボル的な機構や組織の中に全体的な調和を人格形成の場合と同じように見事に組み込んでいる有機体である。

○言葉は、すべて象徴であり、形式（記号）とその示すところの内容、あるいは、示す概念との関係は、言葉を生み出し、また刻々に生みつつある精神によって維持されるものである。

○言葉は、そのものの中に、人間が本来的に備えている無制限な形成能力の領域にふさわしいだけの、それなりのまとまった全体性を潜めているものである。

○言葉は、個々人の創り出すものよりも、民族や国民の産み出したものの方が先行するものである。

○言葉は、伝統の伝えるところとしては、人間の心に対して外在的であり、一応独立したものである。

　しかし、その産出と使用においては、人間の心に依存し、所属するものである。

○言葉は、ある時代から次の時代へと伝えられていくものである。

　たとえ、そのままの形で伝えられなくてもその要素だけは少なくとも伝えられていくものである。

○言葉は、一瞬一瞬に光を投げかけ、初めも終わりもない無限性を人間全体と共有するものである。

○言葉は、ひとつの確立した体系として個人に外在し、先在するものである。

○言葉は、古い昔の世代の人々の感じ取ったものを全部貫いて流れてきており、過去の息吹を今に伝えるものである。

○言葉は、現実、現在の活動であると共に歴史的な結果や遺産でもある。

○言葉は、永遠に現在として流動するものである。

○言葉は、常に動いており、エネルゲイヤ（生き物）であり、根底に自由を有するものである。

○言葉は、エルゴン（完成した作品）ではなく、エネルゲイヤ（生きて働くもの）である。

○言葉は、生命的なはたらきをするものである。

○言葉は、生命の失われた産出物ではなく、生きた息吹きの中で創り出す活動である。

○言葉は、常にあらゆる瞬間において過ぎ去りつつあるものである。

○言葉は、瞬間的に過ぎ去っていく精神の活動である。

○言葉は、人間の自己能動性と受動性とを結合するものである。

○言葉は、人間の表現の完成を目指して働くエネルギーである。

○言葉は、終始中断することなく、あらゆる瞬間ごとに移ろい続けてゆくものである。

　文字に書き写して移ろう言葉を留めようとすることでさえも、結局は、言葉をミイラのような形で保存するだけの不完全なやり方に他ならず、書かれた物をもう一度口に出して身近なものとする手続きがどうしても必要とされてくるものである。

○言葉は、意味を持った生命あるもののまとまりであり、息吹きである。

○言葉は、民族的であると共に個人的でもある人間の生の吐き出す、精神的な気息とも言うべきものである。

○言葉は、社会的なものである。

○言葉は、その起源においても、変化においても、一人のものではなく、すべての人のものである。

○言葉は、複数の人間の間でとりかわされるものである。

○言葉は、どんなに異なった個性の持主に対しても、等しく道具として役立つ使命を帯びているものである。

○言葉は、極端にまで異なった個性の持主が、外的な営みについて相互に語り合い、内面的な知見を互いに交換し合って、個性の相違があるにも拘らず、それを超えて一つに結ばれていく中心点である。

○言葉は、単に人間同志の相互理解のための交換手段であるばかりでなく、精神が自己の持つ力の内的な活動によって、精神自身と対象との中間に定立する真正なひとつの世界である。

○言葉は、語り手と聞き手の両者をうまく調和させてみずから媒介の役割を果たしつつ、その両者の心を動かし、駆り立てる人間の本質の最も奥深いところからしぼり出されてきた分節音声という繊細な信号によって構成されるものである。

○言葉は、個人においてのみ産み出されるものではあっても、その産まれ方というものは、それぞれの個人が万人に理解されることを前提にしていると共に、他の人々すべてがこの期待に実際に応えるという暗黙の了解の下に成立しているものである。

○言葉は、人間が世界を見る時、最も直観的な形を取りつつ、最もうまく意味を現わすように自ずから叙述していくものである。

　そうしてできあがった言葉による表現は、今度は元の世界の見方を最も純粋に再現する働きを持つものとなってくる。

○言葉は、あらゆる点、あらゆる時代において、あたかも自然のごとく人間に対して常に無限なものとして現われてくるものである。

○言葉は、人間にとって自然そのもののように思われ、無限の豊かさを秘めた鉱脈の如くに感じられるものである。

○言葉は、人間世界の宝庫である。
　この宝庫の中で、精神は常に未知のものを発見し、人間の感受性は未だ感じ取ったことのないものを知覚することができるのである。

○言葉は、たとえ書かれたものという形を取っている時でさえも、精神がその気になればいつでも文字の中に眠っている思考を目覚めさせるようにしているものである。

○言葉は、精神と自然との間を永劫にわたって媒介するものである。

○言葉は、精神と心情の最も秘められた片隅にも入り込んでくるものである。

○言葉は、感性的に知覚された対象であれ、内面的に構成された対象であれ、あらゆる対象に無差別に及んでいくものである。

○言葉は、人間の思想と音声形式（話し言葉）、書記形式（書き言葉）を結ぶ媒介者である。

○言葉は、思考、発声器官、聴覚の三者が分かち難く結びついたものである。
　しかもこの結びつきは、人間の本性の仕組みそのものに常に根ざしているものである。

○言葉は、内面的な言葉の形式や法則と音声形式とが結びついたものである。

○言葉は、人間という有機体全体の精神の力と結びついている音声形式そのものや、対象を表現したり、思考を結合したりする際の音声形式の用い方とによって構成されているものである。

○言葉は、分節された音声に思想を表現する能力を与える永遠にくり返される精神の働きである。

○言葉は、観念形式と音声形式、および、この両者の間に成り立つ活力に充ちた相互浸透作用である。

○言葉は、人間が内部に有する素材としての個々の言語的要素を精神的に統一して把握する一つのやり方である。

○言葉は、音声や文字という記号と意味とが結びついたものである。

○言葉は、語、句、文、文章という構造を有するものである。

○言葉は、文であり、物語り、叙述するものである。

○言葉は、語彙と語法、文法より構成されているものである。

○言葉は、法則性と形式性を具えているものである。
　これは、人間の精神力の有する形成作用によるものである。

○言葉は、全体としてまとまりのある一つの作用をする連続体や流れである。

○言葉は、問いと答えの形式を有するものである。

○言葉は、精神の内的行為と総合的に結びついているものである。

○言葉は、言葉が実際に産出される状況や行為の中に存在するものである。

○言葉は、自己活動を行ないながら内面にある言葉からのみ生起してくるものであって神のごと

くに自由な存在である。

○言葉は、人間の生命原理とともに存在し、機能するものである。

○言葉は、あらゆる人の孤独な精神の深みに宿るものである。

○言葉は、自由自在に、意図なしに、胸の中からほとばしり出るものである。

○言葉は、常に体系化の途上にあると共に、体系破壊の途上にもあり、常に動いているエネルゲイア（活動性）である。
　同時にそこには自由も存在する。

○言葉は、確固とした面と流動的な面の二面を持つものである。

○言葉は、人間による不断の創造である。

○言葉は、世間で通常考えられているよりも遥かに深い意味で内在的であり、かつ、構成的、構造的なものである。

○言葉は、その形式がいかに錯綜したもののように見えようとも、その有機体としての構造を見る限り、一貫した整合性を保ち、言葉としてのまとまりを堅持しているものである。

○言葉は、さまざまな外からの印象を、単に受動的に受取るだけでなく、人間の知性の進み得る多様な方向の中から一つずつ選び取りながら成長していくものである。

○言葉は、人間の複雑多岐な心情の動きに影響されて、自分の中に力強さ、繊細さ、内面性などを高めていくものである。

○言葉は、芸術と同様に不可視的なものまでも感覚的に表現しようとするものである。
　言葉は、個別的にも日常の使用状況についても一見現実を超えていないように見える。しかし、常に全ての対象の姿だけでなく、その対象の目に見えない結合と親近関係の全体像が言葉の胎内にはひそんでいる。それ故に芸術家の絵画のように、言葉というものは、自然に忠実で、技術を隠したり、霧や露にしたりしながら、特に表現したい対象については、いろいろな色彩で描写するわけである。

○言葉は、人間の持っている力の総体に常に必然的に結びついているものである。

○言葉は、人間性の全体から発現し、これと自然とを媒介するものである。

○言葉は、現実に生きて働いている人間の個性と相関関係にあるものである。

○言葉は、人間性を写す鏡である。

○言葉は、あらゆる人間らしい活動の媒介者である。

○言葉は、人間と世界の間の交流を可能にする媒介者である。

○言葉は、全体と個との活動が相互に交錯して融合した創造物である。

○言葉は、人間の悟性的なものと、感性的なものとを具体的に結合するものである。

○言葉は、創造的総合であると共に総合的創造でもある。

○言葉は、部分にして全体、活動であると共に結果、内在にして外在、能動にして受動でもある。

○言葉は、常に総合であると共に分析であり、かつ、相剋でもある。

○言葉は、ひとつの全体性として見ると、個々の思考活動とは、無関係に存在しているものと見

なすこともできる。

○言葉は、文芸と常に歩みを共にしており、この二者は、分かち難く結合しているものである。

○言葉は、個人間の相違そのものに関する限りは、平等化へ向うよりは、むしろ、その差を拡げる役割を果たすものとなる。

○言葉は、それぞれの個人で使い方が変わるものである。

○言葉は、人間の精神の力が自己を表現してゆく主要な源泉のひとつである。

○言葉は、エネルギヤ（活動体）であると共に媒介手段である。

○言葉は、人間同様、ひとつの有機体である。今様に言えば、複雑系である。

○言葉は、それを使う民族や集団の文化のシンボル（象徴）であり、世界観である。

○言葉は、主観と客観をつなぐ媒介者である。

○言葉は、人間の主観と客観とが完全に自らを総合する作用である。

○言葉は、人間が主観性へ還帰する必然性を持った客観性への移行ということを不断に行なう際の媒介者である。

○言葉は、人間が主観的世界と客観的世界を交流する際の不可欠の媒体である。

○言葉は、主観の影響を受け、主観に依存している限りにおいてのみ、客観として働きかけてゆく力を持ち、主観から独立した存在性をも持ち得るものである。

○言葉は、客観的思考の創造や主観的力の向上が互いを高めながら相互より生じる交錯点に向って直接的に作用するものである。

○言葉は、主観と客観、従属性と独立性という対立する概念を融合する働きをするものである。

○言葉は、個人と民族、個人と個人、個人と社会、存在と無、過去・現在・未来・有限と無限、可視と不可視、話されたこと（過去）と話すこと（現在の使用活動）等々をつなぐ媒介者である。

○言葉は、本当のことを言えば、教え得るものではなくて、人間の心の中に喚び起こすことができるだけのものである。

○言葉は、一方的に学びとるものではなくて、子どもたちの言葉の能力が内から展開してくるものである。

○言葉は、人間ならば誰にでも与えられている普遍的な能力の発露として発達し、形成されていくものである。

○言葉は、社会的交渉の影響、並びに個人内部の自己創造によって成長するものである。

○言葉は、無限の抗道である。

○言葉は、人間の心から独立しながらも、片方ではそれに依存しているものである。

○言葉は、対象そのものの複製ではなく、対象について心の中に創造された形象の複製である。

○言葉は、観念の世界においてのみ捕捉され得るものであって、感覚的にはとらえることのできないユニークなものである。

○言葉は、精神の力と直接の関連性を持っている完全な有機体である。

○言葉は、音、語、文といった音声形式、それを基盤にした文字形式等の限られた手段を使いこ

なして、頭の回転に応じて無限の用法を創り出していく働きである。

○言葉は、精神活動という内面的形式と、話し言葉や書き言葉という表現形式とが合体したものである。

《まとめ》

フンボルトが言葉の本質について最も力説したかったこと、すなわち、彼の言語観や言葉についての言説の核心部分を本人の意図に逆らって敢て強いて抽出、要約するならば、以下のようなことになるのではなかろうか。

(1)　言葉は、人間的存在そのものの最も本質的な要素である。

①　言葉によってはじめて人間は人間になることができる。

②　言葉と人間とは分かち難く結びついているものである。

(2)　言葉は、人間同様、どのような角度から眺めてみても、極めて複雑な有機体である。

(3)　言葉は、人間世界の森羅万象を概念として抽象し、音声や文字などによって記号化し、シンボライズ（象徴化）したものである。

(4)　言葉は、民族や人間の文化、つまり、世界観や哲学、すなわち、物の見方、考え方、感じ方、振舞い方であり、魂や霊であり、同時に息吹きである。

(5)　言葉は、人間と人間とを結びつける共通のイメージやメンタリティを生み出す民族や社会集団の有する恣意的な慣習記号の体系である。

(6)　言葉は、人間が思考、感情等の精神活動を行なったり、人間同志がコミュニケーションをしたりする際の媒介手段である。

(7)　言葉は、人間の学習や教育、自己形成、精神陶冶等にとって不可欠の手段である。

(8)　言葉は、人間が、聞いたり、話したり、読んだり、書いたり、認識したり、考えたり、感じたり、行動したりする時の媒介手段である。

(9)　言葉は、エネルゲイヤ（生命体）であり、その根底に自由を有するものである。

(10)　言葉は、人間である限りすべての人間が獲得し得る普遍的能力であり、しかも民族の持つ文明の進度の如何に拘らず優劣の差などないものである。

(11)　言葉は、周囲で使われている言葉を実物、状況、場面等と結びつけてくり返し聞くことによって個人の頭脳の中に喚びさまされるものである。

(12)　言葉は、表象、概念、アイディア、思考、想像、感情等の内的形式と、話し言葉（音声形式）や書き言葉（文字形式）等の外的表現形式を有するものである。

しかしながら、「むしろ、単純に抽出したり、要約したりできないところにこそ言葉の本質が存在するものであり、それほどまでに複雑千万なもの、これが言葉というものである。抽出、要約すること自体、ナンセンスである。大間違いもいいところである。複雑なものは複雑なままにありのままに把握せよ。それが言葉というもののとらえ方なのだ。」と、フンボルト大先生のきついお叱りの声が聴こえてきそうな心配も無きにしも非らず。

いずれにしても、言葉の本質の極めて多様にして複雑な具体的側面と、抽出的、要約的側面、あるいは、本質の更なる本質的部分の総体にわたり、トータルとして、あるいは、グローバルに言葉の本質を把握していくこと、これがやはり、フンボルトならずとも、真実の意味での言葉の本質への迫り方ではあるまいか。

言葉とは、一言、二言、三言ぐらいではとても

その本質をとらえることのできないもの、むしろ、フンボルトが生涯をかけて把握した言葉の本質にかかわる全ての事柄や事実を包含して、肯定してかかること、これこそがより言葉の本体に近づく途ではなかろうか。言葉にかかわる研究者も、臨床家も、心してかかるべき大問題である。

(2000．9．28　受理)

参考・引用文献

1　フンボルト (Wilhelm von Humboldt) 著：「言語と精神 (ÜBER DIE KAWI-SPRACHE AUF DER INSEL JAVA)」亀山健吉訳　法政大学出版部　全672頁　1993年

2　亀山健吉著：「フンボルト」　中公新書　中央公論社　全270頁　昭和53年

3　泉井久之助著：「言語研究とフンボルト」　弘文堂　全401頁　昭和51年

4　C．メンツェ　編　「W．V．フンボルト　人間形成と言語」　小笠原道雄、江島正子訳　以文社　全236頁　1989年

5　J．T．ウォーターマン著：「現代言語学の背景―展望と現状―」上野直蔵・石黒昭博訳　南雲堂　全146頁　1975年

6　ディヴィッド・E・クーパー (David E. Cooper) 著「ことばの探求―その哲学的分析 (PHILOSOPHY AND THE NATURE OF LANGUAGE)」　大出晃、服部裕幸共訳　紀伊国屋書店　全422頁　1976年

7　G．A．ミラー (George A. Miller) 著「ことばの科学 (LANGUAGE AND SPEECH)」　無藤　隆・久慈洋子訳　誠信書房　全195頁　1993年

8　築島謙三著：「ことばの本性　その心理学的考察」教養選書10　法政大学出版局　全249頁　1971年